鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第46号，87－103　2016

Gプロジェクト2014

Hearts in Harmony~みんなで届けるありがとう～

佐々木　亘，森永　初代，濱﨑　千鶴，中村　民恵，末永　勝征

G Project 2014
－Hearts in Harmony:“Thank you”from All of us Together－

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

Ｇプロジェクトとは，学芸，情報，テキスタイル（モード部門・パッチワーク部門），フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し，グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に，プロデュース力，グループ力，コミュニケーション力の向上を目的とする，現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマは，「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう～」に決め，制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。また，錦江町からの依頼を機に発足した“地域貢献プロデュース”も二年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し，演出を行ったかを，学生たちのレポートをもとに報告する。

Key Words:［トリプルパワー］［問題解決能力］［大学祭］［感謝のこころ］［地域貢献］

(Received September 24, 2015)

序

Ｇプロジェクトとは，「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは，個々の学生がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し，専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた五つのプロデュースにもとづき，個性の伸長をはかるとともに，学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。

今回は，学生一人ひとりが「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう～」という想いを共有し，各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。情報プロデュースは，さまざまな活動を行ったが，とくに三部構成の舞台発表の第一部におけるオープニング映像でＧプロジェクトを総合的に印象づけ，学芸プロデュースは「A Gift From The Future

＊鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

～ありがとうで未来は変わる～」という動く絵本で舞台発表の第二部を演出した。テキスタイルプロデュース（モード部門）は，ドレス制作を通して表現力を養い，舞台発表の第三部で，一人ひとりがそれぞれ個性的な演出を試み，またテキスタイルプロデュース（パッチワーク部門）では,共同制作やシュシュの制作を通じて大学祭を盛り上げた。そして,フードプロデュースは，アップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に，Ｇカフェで新製品を開発するなど，1・2年生が一致協力して，大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに，二年目を迎える地域貢献プロデュースは，錦江町の方々と協力し純心水田プロジェクトを行うなど，精力的に活動した。

本報告は，2014年度に行われた「Ｇプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は，この報告を一つの反省材料として，さらなる発展を模索していく。

Ⅰ．情報プロデュース

2014年度の情報プロデュースは，大学祭の舞台発表にあこがれを抱き，自分たちで映像を制作してみたいと8名の学生が選択した。興味はあっても撮影に関する知識や映像を編集するスキルがあるわけではないため，1つ1つの作業に時間がかかり，リーダーを務めた藤崎みのりは1年間を通し計画的にすすめることができず苦心していた。学生たちの取り組み状況については藤崎みのりの報告を参照されたい。

学生たちは各自，スマートフォンで動画や静止画を撮影し，SNSなどで情報を手軽に共有している。しかし，情報プロデュースで利用していたデジタルカメラやビデオカメラで撮影した映像を素材として利用すると,「少し離れた場所から撮影したビデオ映像においては音が小さい」,「デジタルカメラの画像は拡大すると画質が粗い」という問題が生じていた。そのため,被写体から離れた場所で撮影しても音声を拾えるワイヤレスマイクロホンを購入し，ビデオカメラとセットで使うようにした。また，適当な価格できれいな映像を手軽に撮影できるミラーレス一眼カメラの購入も検討してみたが，レンズ交換が必要となり学生の利用には適さないことが判明したため，光学ズームに対応したコンパクトデジタルカメラを購入した。

撮影時の問題が解消されると，例年に比べ撮影回数も増えた。しかし，撮影準備や撮影後のデータ整理など学生同士でうまく連携できていない状況が見られた。素材はできるだけ集めたほうが良いと，先輩からの引き継ぎを受け，増え続けるデータの整理をできずにいた。

事前に，撮影したデータをどのように利用するかを想定せず，明確な目的を持って撮影を行なわなかっことも一因としてあげられる。また,撮影後すぐにパソコンにデータを取り込まず,誤ってデータを削除し，どこにあるのかわからない状況になることもあった。特に，大学祭前は行事ごとにいろいろな依頼があり，それぞれに分担した作業に追われ，自分たちの抱えている問題を共有できずにいた。

そのような状況においても情報を共有し，お互いの状況を確認し，物事を俯瞰的に捉えることができていれば同じような失敗を繰り返すことなく効率よく作業が完了したのではないかと考える。

例年に比べ人数も多く，真面目で個性的な学生たちであったので，集団としてまとまり行動することが難しかった面もあったが，1年間の活動を通して，考え方や感性の違う他者と協働することができるようになった。また，一人ひとりが「失敗から学ぶ」という点においても，「失敗を恐れず挑戦する気持ちを持ち続ける」という点においても，「どのように解決するか知恵を出し合う」という点においても，失敗をきっかけに大きく成長できたのではないかと考えている。（森永初代）

情報プロデュースでは，一年間を通し，iMovieやKeynoteなどの機能を学び，パソコンのスキルアップを目指した。前期は，名刺や名前シールの作成，卒業式や入学式，体育祭，聖母行列等の撮影・編集・DVD制作など様々な活動に取り組んだ。アプリケーションは，初めて使用するものが多く，試行錯誤の繰り返しだったが，だんだんと慣れていった。

また，キャンパス見学会では，iMovieの予告編機能を使用し体育祭の様子を短編ムービーとして制作し，情報プロデュースの活動として紹介した。2014年度は，情報プロデュース選択者が8名と学芸プロデュースの3名よりも多かったため，学内行事を題材とした新聞「G. PROJECT TIMES」は，情報プロデュースが担当することになった。

図1　号外

例年の学内行事に加え，今年は，地域貢献プロデュースが参加する水田プロジェクトについての新聞（図1）も作成した。初めは各自で思い思いに作っていたが，書式を統一するためテンプレートを作成し，それをもとに新聞を作成するようにした。統一する項目としては，新聞のタイトルの大きさ，位置，見出しのフォントの種類とサイズ，などである。背景は，できる限りその行事にあうように工夫することにした。

大学祭では例年通り，現代ビジネスコース発表部門としてムービーを制作した。ムービー制作，DVD作成において使用したアプリケーションは，iMovieとiDVDである。2014年度は，コースのテーマであった「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう～」をもとに，現代ビジネスコース2年生の絆や感謝の気持ちを表現できるようなムービーの制作を目指した。

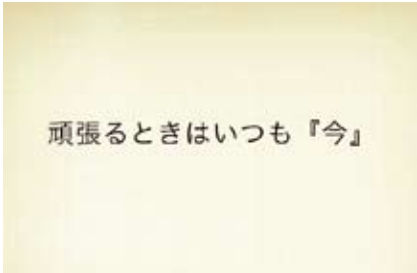
ムービーのコンセプトをＧコースの繋がりの強さや感謝の気持ちから，「絆」とした。使用楽曲は，Hi-Fi CAMPの「キズナ」である。使用した写真や動画は，現代ビジネスコースの学生の笑顔の写真や，学生生活の日常風景，頑張っている様子など，2年間の短大生活での活動すべてを対象とした。撮影を続けるうちに，撮影した写真や動画をどこに保存したのか分からなくなるという事態が発生したが，みんなで話し合い，保存場所についてのルールを決めることにした。ムービーは，一冊のアルバム風に仕上げ，曲の長さに合わせ約3分52秒で構成し，2年間の学生生活を振り返った。

大学祭まで，現代ビジネスコースの発表部門を担うテキスタイルプロデュース（モード），学芸プロデュース，情報プロデュースのチーフ，サブチーフでミーティングを重ね，主に舞台発表の方向性や現状報告，リハーサルなどスケジュールについて話し合った。

リハーサルは，10月に入って初めてテキスタイルプロデュース（モード），学芸プロデュースと合同で行った。準備した映像をDVDに書き出していなかったため，パソコンをプロジェクターに接続して流すことにした。ここでの最初の反省点は，リハーサル前にパソコンの接続の仕方や，DVDプレーヤーの使い方，プロジェクターの使い方などをきちんと理解し，自分たちで使えるようにしておかなければならなかったことである。リハーサルで先生や他のプロデュースの人たちからのアドバイスを受け，みんなで話し合いながらムービーの修正を行い，少しでも良い作品に仕上げようと本番まで編集を重ねた。

2014年度の映像制作で工夫した点は，構成において1冊のアルバム風に仕上げたこと，より分かりやすい映像にするため，文字で表したこと，動画と動画の間で，赤い糸のハートを書いて絆を繋いだこと，コーステーマを最後に表示させたことである（図2)。映像はみんなで意見を出し合いながら制作し，大学祭当日の朝までかかり完成させることができた。

1）アルバムを開くシーン



2）言葉のシーン

3）ハートのシーン

4）ラストシーン

図2　映像制作

皆と協力し，支え合いながら大学祭の準備を進め，その過程で感じたこと，学んだことはとても大切な経験になった。展示部門のチーフや催し部門のサブチーフなど，メンバーそれぞれが，情報プロデュース以外の役割も務めていた。そのため，時間を調整することが難しかったが，8人で役割を分担し，協力して活動に取り組んだ。一緒に活動したメンバーや周りで支えてくださった方々の協力があったからこそ，完成させることができた。この情報プロデュースの活動を通して，報告・連絡・相談・確認の重要性，チームワーク，相手のことを考えて行動することなどの計画性を学んだ。これから社会に出るにあたって，周りの人への感謝を忘れずに，何事にも学ぶ気持ちを持って一生懸命努力していきたい。(藤崎みのり)

Ⅱ．学芸プロデュース

学芸プロデュースでは，共同研究として，大学祭での発表を目指し，「動く絵本」作りに取り組んだ。2014年度は，人数が10名から3名に大幅減となり，最初はどうなるかと心配した。しかし，「A Gift From The Future ～ありがとうで未来は変わる～」というタイトルからもうかがえるように，メッセージ性に満ちた良い作品になったと考えている。そして，大学祭2日目の2014年10月26日（日）に，舞台発表の第二部を，無事飾ることができた。

成功の要因はいくつか考えられる。まず，作品の核となるシナリオと絵コンテがかなり早い段階で完成し，5月ごろから作画と録音の作業に着手することができたことである。細かな修正は加えたが，シナリオそのものに大きな変更はなかった。

次に，1年生のサポートと卒業生の助言である。50枚もの作画には人海戦術的要素が不可欠で，いくら早いスタートが切れたとしても，3名のメンバーだけでは限界がある。この課題を1年生のサポートによってどうにか乗りこえることができた。また，本番間際になって，卒業生からの非常に有益な助言を受け，直前の微調整が作品の完成度を引き上げたのである。（佐々木亘）

2014年度，学芸プロデュースの「動く絵本」は「A Gift From The Future ～ありがとうで未来は変わる～」というタイトルである。テーマに込められた願いは，「ありがとうで未来は変わる」というメッセージ。「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えることを中心に制作していった（図3）。

タイトルの「A Gift From The Future」は，直訳すると未来からの贈り物という意味で，この場合は未来からの贈り物ということだけではなく，「分からない未来だからこそ，自分の頑張り次第で何通りにも変えることができる」，また，「今の努力で自分を助けるだけではなく，ほかの人の助けにもなる」という思いも込めた。

制作するにあたりＧコースのテーマでもある「Hearts in Harmony」に沿って，「愛」という形がないものをどのように表現するのか，また「ありがとう」という相手への感謝の気持ちを伝えることを中心に考え，物語から制作した。

図3　学芸テーマ

情報プロデュースから学芸プロデュースの「動く絵本」へと切り替わる際や，反対に「動く絵本」が終わった後に，テキスタイルプロデュース（モード）へと切り替わる際に統一感を持たせたいと考えた。そのため，見ていただいたお客様に「ありがとうという感謝の気持ち」が伝わるのかということを重点的に，発表部門で何度も集まり話し合いを行った。その結果，情報プロデュースがハートを描くところを録画し，動画の中にそれを組み込んだため，学芸プロデュースも同じように始まりと終わりにハートを描くことで，情報プロデュースからテキスタイルプロデュース（モード）へと流れを作ることができ，3つのプロデュースのHarmonyを繋げることができた。

2014年度，「動く絵本」を制作していくうえで，工夫したことは3点ある。1点目は，物語の

場面や流れが分かるように，物語の節目にナレーションを入れたこと。前年度は，ナレーションを入れずに動画上で表示し，場面ごとに文字だけで人物の心情や言葉を入れていた。ナレーションを入れることで，「動く絵本」で表現したいことが分かりやすくなり，また，登場人物の年齢を私たち学生と同じくらいの年齢にすることで，子どもから大人といった幅広い年代の方々が，見やすくなったと感じる。

2点目は，声の編集である。今回，物語の中でリョウという男の子が，現実の世界のリョウと，夢の世界の10年後のリョウとして登場し，その際に区別できるように現実の世界のリョウの声を高く，10年後のリョウの声を低く調節する「ボーカルトランスフォーマー」という機能を使い，声の編集をした（図4）。

図4　登場人物

3点目は，物語の中に登場する未来の郵便配達をするウサギという設定のもと，「うさたく」というキャラクターを制作したことである。最初，「うさたく」の動きがうまく表現できず，どうすればいいのか考えたが，何度も試行錯誤をした結果，納得のいく動きをつけることできた。愛らしい顔をしており，前年度に引き続き物語に登場するキャラクターを制作することができ本当に良かったと感じている（図5）。

図5　うさたく

2013年度と2014年度の相違点は，1年生に協力してもらったことである。1つ1つの作業にとても時間がかかることから，先生方に相談したところ絵に詳しい1年生がいると聞き協力を得た。しかし，ただ手伝ってもらうというのではなく，どのように「動く絵本」を制作していくのかという流れを一緒に確認したり，反対に1年生に絵の編集の仕方を教えてもらったりといった交流をはかることができた。

2014年3月から学芸プロデュースの活動をしてきたが「動く絵本」を制作していくことで，いくつもの発見があった。まず，細かくストーリー設定していないと，途中で何を伝えたかったのかということが曖昧になり，伝えたい気持ちがしっかり物語に生かせなくなる。見る人へ気持ちや物語が分かるように，制作していくことは私たちの中で難しく感じた。「動く絵本」が完成し，無事に大学祭で流すことができたのは，学芸プロデュースのメンバー，協力してくれた1年生，様々なアドバイスをくださった先生方のおかげである。今年は，1年生と共同で制作する形になったが，とてもいい経験となった。感謝の気持ちでいっぱいである。（港美緒）

Ⅲ．テキスタイルプロデュース（モード）

テキスタイルプロデュース（モード）の選択者は2014年度14名と少なかったが，チームワークは非常によかったと感じている。制作においても時間に余裕を持って活動できていた。学生一人あたりの作業スペースが広く，スムーズに活動できていたこと，活動記録を詳細に記入させたことなどがあげられる。細かく目標を設定させることで効率よく活動できていたのではないかと考える。まったく，縫製を経験したことのない「ゼロからのスタート」の学生達であるため，時間をかけても丁寧に作業することを徹底して指導した。

また，2013年度はリーダー1名，サブリーダー1名であったが，2014年度はリーダー1名，サブリーダーを2名とし，リーダーにかかる負担を分散させ，リーダーはモード全体をまとめ，サブリーダーがそれぞれのプロデュースとの連絡係を担当した。モードのリーダーは舞台発表全体のプロデューサーとして，全体の演出についても中心になって活動するからである。

第7回目ともなると演出も難しくなってくる。限られた環境のなかで，いかに自分達らしさを演出していくかが，今回の大きな課題となった。いつもより少ない出演者で，先輩に負けない舞台を構成しなければならない。人数が少なかった分まとまりは早かった。情報の伝達や意思の疎通がスムーズにいったからだと考える。その分，演出にも時間を費やすことができた。彼女たちの試みは上山聖華の報告にもあるように第3部の冒頭でのシーンに込められている。

まず,和と洋のコラボレーションである。今までは大裁女物単衣長着(浴衣)で舞台の冒頭シーンを演出していたが，和の演出に変化をつけた。また，よりシーンの演出がわかるようにバックスクリーンに筆書きしたテーマを映した。これはリーダーである上山聖華が手がけた書をスキャナーで読み取り，プロジェクターで映した。手書きのあたたかみが伝わり，今回のテーマである「愛」を表現するにあたってとても効果的であったと考える。学生達自身も舞台発表において自己満足に終わってはいけないことを実感し，客観的な評価がいかに重要かを痛感したと報告している。ただ，自分が作りたいものを自己満足で作るのではなく，「常にお客様に観られるのだ」という意識を持って，考えながら制作，舞台練習するようにしたとも述べている。

発表までのプロセスにおいて今回のテーマである「愛」とは何かを考え，ただ「美しく」演じるだけでなく，その想いをカタチにするための感性を養い，常に相手がいることを考えて行動できるようになったのではないかと思う。そして，集団で活動していくなかで，自分がみんなのために何ができるのか，自分の役割をしっかり理解し，果たそうとすることがチームワークにもつながり，大切だということに気づいたであろう。この活動を通して，「誰かのために，一生懸命になれる女性」に成長できたのではないかと考える。(中村民恵)

テキスタイルプロデュース（モード部門）では，「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう～」というコースで決定したテーマから，発表部門で「愛」を表現していこうと決めた。そして，モード部門では，「天空からのラブ・ソング」というテーマをもとに，それぞれが制作しているオリジナルドレスを分析しながら「愛」を8つの場面に分けて構成を考えた。

「天空からのラブ・ソング」とは，心で感じる愛だけでなく，天空から舞い降りてくるたくさんの「愛」があるということを表現したものである。私たちはいつも気付かないところで家

族から支えられ，たくさんの愛情を受けてきた。本学に入学して「愛」とは，見返りを求めず，常に相手の幸せを願うこと。つまり無償の愛であり，生きていくうえで大切なことであるということを学んだ。このことを表現するためにメンバー全員の気持ちを一つにして舞台に立った。今年度は演出の最初に和と洋のコラボレーションを取り入れ（図6），テーマをわかりやすく伝えるためにスクリーンに筆で書いた手書きのテーマを映し出した（図7）。

図6　和と洋のコラボレーション

図7　モードのテーマ（手書き）

天空からのラブ･ソングの演出は下記の通りである。

シーン1　命を吹きかけ光が灯される

・生成り色のマントを着た光の妖精が現れ，私たちの心に小さな愛の光を灯す。

・照明はシルエットを用いることで効果的に演出した。

シーン2　大裁女物単衣長着

・大裁女物単衣長着（浴衣）の2人が登場するが，始めは小さな愛の光で静のイメージから，少しずつ光を明るくしながら次のシーンにつなげた。

・照明を徐々に明るくすることで，静から動にゆっくりと変化させた。

シーン3　初恋（ペパーミントグリーンとピンクのドレス）

・初恋の何とも言えない心の動きをペパーミントと淡いピンクのドレスで表現し，恋を楽しんでいるさわやかイメージのシーン。

シーン4　純白（白のドレス）

・純粋な心と誰もが憧れを持っているweddingをイメージ。

・同じ白でもデザインや素材の違いから，3人が自分の個性を活かして表現した。

シーン5　片想い（ショッキングピンクとロイヤルブルーのドレス）

・色の濃いドレスで片想いをイメージした。恋のライバルが現れ，お互いを強く意識している心をイメージ。

・照明は暗転から入り，ライバルを強く意識し合う心情を赤いライトを用いて，激しいイメージを演出した。

シーン6　光の妖精（オレンジ系の花柄ドレス）

・ここで，これまでの強いシーンとはイメージを変え和やかなシーンと場面を展開させるために妖精が現れ，会場内に向かって光を灯すイメージで演出した。

シーン7　恋人との再会（サーモンピンクと赤のドレス）

・前半とはイメージを変え，落ち着いた女性をイメージした。

・恋人と再会した時の想いを甘く切なく表現したシーン。

シーン8　大人の恋，真実の愛（エメラルドグリーンとブルー，黒と真紅のドレス）

・真実の愛とは何であるかをこれから見つけようとするシーンをエレガントなドレスで表現した。

このようにシーンを8つに分けたが，使用する音楽は全て洋楽であるため歌詞を翻訳し，その歌詞の意味も考えながらイメージを創り上げていった。翻訳はフリーの翻訳サイトを活用した。その情報を全員で共有し，自分のシーンだけでなく，舞台の構成全体を把握できるようにミーティングを繰り返した。

舞台をつくりあげていく中で，それぞれの想いがあった。その想いや考えをどのように表現し，まとめるのかはとても難しいことであった。しかし，「愛」というテーマと向き合いながら舞台を構成していった。

舞台発表を通して，私たちは外観の美しさだけでなく内面的な美しさも学んだ。いくら外観を着飾ってドレスに装飾を施しても本当の「美しさ」に近づくことはできないことを実感した。愛情を込めてドレスにアイロンをかけること，集団で活動するなかで芽生えた「感謝の心」を忘れないことや，仲間との繋がりを大切にすることはチームとしてあたりまえのことである。集団で活動を行う中で仲間とどのように切磋琢磨していくか，お互いに指摘し合う厳しさも必要であることを学んだ。そして，周囲に対する心配りの大切さを改めて気づかされた。

「愛」とは何かというテーマから始まり，チームで活動を行っていく中で，私たちの考える「愛」とは，家族からの愛はもちろん，「人との絆」であると気づくことができた。モードを選択して，周りで支えてくれる存在のありがたさを改めて実感し，舞台発表全体を通して，本当の美しさとは何かを感じることができた。そして，かけがえのない仲間との強い絆，相手のことを思いやる心をこれからの人生において大切にしていきたいと考える。何よりも「天空からのラブ・ソング」に込められた想い「本当の愛」とは何であるのかを自分たちの力で見つけることができるようにいつもどんな時も感謝の心と謙虚な姿勢を忘れずに歩んでいきたい。（上山聖華）

図8　発表部門集合写真

Ⅳ．テキスタイルプロデュース（パッチワーク）

2014年度のテキスタイルプロデュース（パッチワーク）は12名で活動した。活動内容としては，大学祭までの期間は，前期に個人制作，後期に個人・共同制作を行い，大学祭終了後は，個人制作と卒業研究であった。大学祭における活動内容の詳細は，プロデュースのチーフを務めた学生の記述を参考にしていただきたい。

活動するに当たり，2013年度までとの違いは，大学祭での展示部門とプロデュースのチーフを別々にたてたことである。これまで，チーフを同じにしていたのは，選択者が少なかったこともあるが，大学祭で制作した作品を展示するにあたり，作業がしやすいことが主な理由であった。しかし，これまでチーフを務めていた学生からの改善点として，可能であればそれぞれにチーフをたてた方が活動しやすいということが挙げられた。幸いにも今年度は選択者が多かったということ，少しでも多くの学生に活躍の場を与えたいと思っていたので，良い機会となった。2014年度は，展示部門のサブチーフが選択者であったので，一人の学生に仕事が集中する

こともなく，お互い協力し合いながら準備を進めることができていたのではないかと思う。

2014年度の共同作品は今までで一番大きい作品となった。共同作品において気をつけなければならないことは，個性を出す部分と正確な作業が求められる部分があることである。今回の作品は，複雑なものではなかったと思っているが，ほとんどが手作業であったため，人によって丁寧さ・細やかさに欠ける部分がみられた。その結果，後からやり直すことになり，修正が大変なこともあった。お互い作業前に確認すること，作業後に報告することが足りなかったように思われる。

当然のことではあるが，1年間の活動で積極的に取り組んでいた学生よりも，うまく自分の意思を表現できない学生の成長はゆるやかであった。それでも一人ひとり，個人作品には自分の想いを込め，布の柄と色，パーツの形，縫い方等で表現しようと工夫を凝らしていた。また，共同制作を通して，自分の意見を積極的に伝えること，相手の意見を聞く柔軟性，仲間同士の協力，必要な時に率先して動けることなど，自分に足りない力を少しずつ伸ばすことができていたようだ。今後，活動を通して身につけた力を，社会の中で発揮していくことを期待する。(濱﨑千鶴)

パッチワーク部門では大学祭に向けて個人制作，共同制作，シュシュを制作した。2014年度の大学祭における現代ビジネスコースのテーマは「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう」だった。自分たちの個性を一つの音に例えてその個性が集まり，一つも欠けることなく調和するということで，私たちにしか作ることのできないハーモーニーを大学祭で伝えたいという意味が込められている。

□個人制作

一人ひとり，イメージするものを型にしていくことで個性が出た作品となった(図9)。パッチワーク，キルティングでは異なる柄，素材，色，形，配置まで工夫を凝らした自分だけの作品に仕上がっている。壁掛けやポーチ，クッションカバーなど実用的なものが多かった。全員パッチワーク，キルティングは初めてのことであり，細かい作業にとても苦戦していた。慣れない作業が続き何度も失敗してやり直すことも多く，試行錯誤しながら進めていった（図10)。また，大学祭前までに作り上げなければならないという焦りを感じながらも完成を想像しながら進めることで制作に対する意欲を高めた。

図9　個人制作

図10　キルティング

個人制作だけでなく，共同制作や他の仕事もあったため大学祭前は緊張感が漂っている中での作業が続いた。そんな中，個人での作業ではあったが，声を掛け合い，ときには息抜きに話をしながら作業を進めることで一緒に不安や見えない壁を乗り越えていった。情報を共有することでお互いの状況を把握することができ，それが

きっかけでまとまっていった。長い期間かけて作った作品が完成した時は，制作への楽しさと達成感を実感できた。

□共同制作

プロジェクトテーマに合わせ，Gコース2年生76名分の名前を「純心讃歌」の音符にのせて刺繍を施した。一針一針に感謝の気持ちを込めて，みんなの心と心を繋いで想いを届けようという気持ちで取り組んだ。音符は自分らしさや個性を表現するためにカラフルな色にした。作業を進める過程で名前がなかったり，音符の大きさや文字の大きさがバラバラになったりとトラブルもあった。しかし，何度も確認を行い完成に向け制作を進めた。サイズが大きく全員で作業に取り組むことができなかったが，週に1回は集まる日を決めて作業を進めた。2013年度の作品よりも大きい作品となったため学生ホールに展示した（図11）。作品名と説明を書いた紙を展示することで，作品を見に来てくださった方々に自分たちの想いや感謝の気持ちが伝わったのではないだろうか。大学祭では先輩方やご家族の方に見ていただくことができて，とてもうれしく思った。制作を通して，メンバー全員と作業を分担して行うことの難しさを学び，またお互いにサポートしながら進めることの大切さを学んだ。多くのことを学びつつ完成させた作品である。

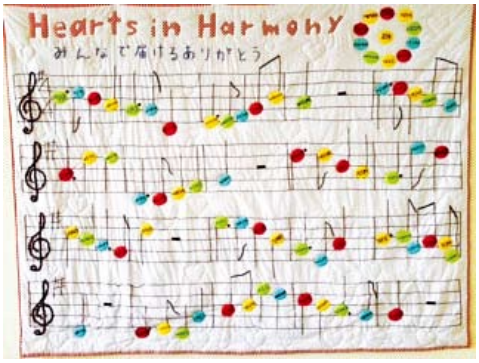


図11　共同制作

□シュシュの制作

夏季休業を利用し，大学祭で現代ビジネスコースの気持ちを一つにするためにシュシュの制作に取り掛かった。2013年度までは2年生の分のみ作られていたが2014年度は1年生の分のシュシュも制作した。2年生76名，1年生65名，膨大な数のシュシュを制作するため，早めに取り組んだ。作り方はインターネットを使用して調べ、試行錯誤しながら制作した。例年よりプロデュース選択者の人数が多かったので役割を分担し効率よく進めることができた。手作りのシュシュのおかげで大学祭では2年生と1年生が一丸となることができたのではないかと思う。

□振り返り

反省点は，夏季休業中に綿密に計画を立てていなかったため焦って共同制作に取り掛かってしまったことである。個人制作とは違い，家に持ち帰ったりすることができないため空き時間を使用し作業を進めた。放課後も帰宅時間ぎりぎりまで残って作業を進める日々が続き大変であった。改めて周りに支えられていることを実感したが，同時に，時間を有効に使うために計画的に進めることが大切だと学ぶことができた。

初めはまとまりがなく自分のことで精一杯になっていたが，授業時間やその他の空き時間で一緒に制作し長い時間をともに過ごすことで，大学祭が近づくにつれ互いに支え合っていったように感じた。パッチワークは基本的に個人作業だったが，一人ひとりが制作に携わるため作業を分担し，全員で一つの作品を作ることで以前よりもお互いのことを理解することができ絆が深まったと考えている。（緒方清楓）

Ⅴ．フードプロデュース

2014年度のフードプロデュース選択者は38名であった。活動内容は鹿児島の食文化（郷土料理等）に触れ，実際に鹿児島の食材を用いて調理し，自分でも作れるようになることと，大学祭に向けて全員で協力し商品制作を行い，実際に販売することである。

アップルパイに関しては，授業時間または空き時間を利用し，クッキーやＧカフェ，2014年度からはじまった地域貢献のクッキーは空き時間等を利用して，大学祭で販売する商品の試作やミーティングを随時行った。大学祭に関しての活動詳細は，総合チーフを務めた学生の記述を参照していただきたい。

鹿児島の食文化に触れることを目的として，学外研修を行った。一つ目は産業会館での鹿児島の特産品についての講話，二つ目は，和食（正座）のマナーもかねて郷土料理をいただく，三つ目は日頃利用しているスーパー等の市場調査である。講話に関しては食だけに限らず，工芸品等も含まれているが，鹿児島のすばらしさに触れることができているようである。郷土料理に関しては，本物の味，料理に込められた想いや歴史を知ると同時に，自分でも作ってみようという挑戦する心，将来的には自分の子どもたちに伝えていかなければという使命感が芽生えて，良い効果をもたらしているようである。市場調査に関しては，普段利用するスーパーを，目的を持ってじっくり眺め，調査することで，地産地消の大事さ，生産者の想い，食品の質と値段等新たな発見があると同時に，ディスプレイ等にも興味をもつ学生もいた。

調理実習・学外研修では，鹿児島の食の魅力を実感し自分から積極的に動くこと，また，大学祭の活動では，メンバー全員で協力して，企画から販売までを行うことで，ぶつかり合いもあるが，一人ひとりの意見を聞き，相手を大切にすることを学んでいたようである。授業の最後に各自研究したことを発表する場をもうけているが，調べるだけでなく，調べたものをもちいて実際に料理したり，現場を訪れたり，本物を食べに行ったりと，自分から動くことで，より一層理解を深めているようである。これから，社会人として歩んでいく中で，学んだことを十分に活かしつつ活躍していくことを望む。（濱﨑千鶴）

現代ビジネスコース食品販売部門では，フードプロデュース選択者38名で制作するアップルパイの販売，Ｇカフェの運営，1年生及び2年生がクッキーを制作し販売する。また，2014年度は2013年度から錦江町での地域貢献を引継ぎ，錦江町の食材を使用したクッキーを制作し販売を行った。先輩方から受け継がれてきた伝統を守るとともに，自分達が新しく作る商品など試行錯誤しながら活動を進めた。

□アップルパイ

2014年度は１ホール1,100円と価格変更をしたことが例年との大きな違いである。価格変更をすることにより，より一層丁寧に美味しい商品を販売することが求められた。全員でのミーティングを何度も開き，90分では足りないほどの話し合いもした。また，流れ作業を行う中で，次に作業する人の事を考えて行動するようにした。そのことを全員が意識し，作業を行ったからこそ，目標であった100個を超え110個を販売することができた（図12）。

□Gカフェ

大学祭当日に商品の制作から販売まで行うため，当日何が起こるかわからないという緊張感があった。お客様に丁寧に早く商品を提供できるように，時間を測り本番を想像しながら，練習を重ねた。アップルパイ同様，流れ作業だったため，次の人のことを考えて作業を行うことが大切であり，ミスがないように，声掛けが重要であった。商品が何かわからなければミスが増えてしまうため，全員で声掛けを行いながら作業を行った。また，大学祭1日目の終了後ミーティングを行ったことで，2日目には改善することができ，よりスムーズに商品提供を行うことができた。天候が暖かかったため，ホット商品が売れるか不安だったが，目標1,000杯を2日間かけて完売することができてよかった（図13）。

図12　アップルパイ

図13　Gカフェ制作の様子

□クッキー

2014年度のクッキーは抹茶に工夫を凝らした。今までの抹茶クッキーは抹茶パウダーのみを使用していたが，抹茶パウダーに煎茶を加えて制作することにした。そうすることで，抹茶本来の苦みに近づくことが可能になった。活動するに当たり1年生とのコミュニケーションを積極的に図り，人に教える難しさを学ぶことができた。そして1年生の意識を高めるために，2年生がどのような姿を見せなければならないのかを考え行動することを心掛けた。増税に伴い，1袋に入れる個数を減らして例年通り100円で販売した。目標個数600袋以上を完売することができ，また純利益も2013年度より上がったので良かった（図14）。

図14　クッキーのパッケージ

□地域貢献

地域貢献は，錦江町の方々とのコミュニケーションを大切にしながら，活動を行った。しかし，他の部門に比べスタートが遅く，具体的な計画も立てることができていなかったため，販売用クッキー制作の前日まで，分量変更を行うこととなった。初めてのことだからこそ，計画的に進めることが必要であったにも関わらずそれができていなかった。確認作業を念入りに行うよう心掛け，大学祭当日は，100袋販売することができた（図15）。

図15　地域貢献のクッキー

□大学祭総売上

2014年度の大学祭の総売上については，以下の通りである（表1)。

表1　大学祭総売上（単位：円）

部門	売　上	経　費	純利益
アップルパイ	132,000円	100,049円	31,951円
クッキー	72,050円	30,225円	41,825円
Gカフェ	168,300円	84,371円	83,929円
地域貢献	10,000円	3,169円	6,831円
合計	382,350円	217,814円	165,536円

□まとめ

全体として，2014年度はフードプロデュース選択者が多かったこともあり，まとめるのに時間がかかってしまった。しかし，大学祭が近づくにつれて，各部門でチーフ・サブチーフを中心としてまとまっていく様子が見られた。また，ミーティングを重ねることで，全員が話し合いに参加するようになり，フードプロデュースとして一体化できた。時間の経過とともにチーフ・サブチーフだけに頼るのではなく，一人ひとりが自覚を持って行動するようになり，大きな壁にぶつかったときは，メンバー全員で話し合い，成功したときは全員で喜ぶことができた。そして，全員が目標に向かって，一つになり，その目標に到達するために協力し，助け合いながら活動に取り組んだ。一人ひとり，大学祭での活動を通して成長できたと思うが，学んだことをこれからさらに生かしていきたい。(田中瑠菜)

Ⅵ. 地域貢献プロデュース

2014年度の地域貢献プロデュースは，インターンシップに代わる学びの場を提供するため，1年次の春休みにインターシップに参加しなかった学生を中心に活動をスタートした。

授業ではなくボランティア活動であるため，「くわがたガールズ」の衣装制作を行った初代の地域貢献メンバーの2年生にお願いし，おはら祭りの踊りの練習を企画した。2年生は山之内理恵氏（本学の図書館司書）に指導を仰ぎ，踊りの練習について相談し，練習の際の浴衣着用を提案された。現代ビジネスコースでは，1年次の授業「テキスタイルプロデュースⅠ」で全員が浴衣を制作しているが，今まで着付けをする機会がなかった。そこで，地域貢献のメンバーで装道礼法部に所属する2年生が，浴衣の着付けを指導することになった。2月中，1年生は2年生の指導のもと練習を重ね，中野絵梨香と黒木美紗子が「おはら祭り」担当として推薦された。3月以降，2人を中心に自分たちで着付けや踊りの練習を企画し，同級生に指導できるまでに成長した。

この他，春休み中に鹿児島市内で開催された錦江町の特産品販売にも1年生をフォローするために2年生が参加してくれた。2年生は就職活動中の学生や内定先の研修や課題があるにも関わらず，後輩を心配し，時間を割いてくれた。そんな姿に，1年生も先輩に負けないように活動を続けようとする気持ちが自然と湧いたようである。授業として単位化されていなくとも，

春休み中の活動を通し，スムーズに世代交代を行うことができた。

この活動が2年目に引き継がれたのは学生たちの地道な取り組みといつも変わらずに学生たちを温かく迎え見守ってくださる錦江町の方々のお蔭である。感謝の意を表したい。(森永初代)

地域貢献プロデュースは2年目を迎え，今年度は新たに，錦江町の食材を使用した「クッキー制作」,「おはら祭り」の練習, 錦江町での「純心水田プロジェクト」の活動を行った。

クッキー制作では，大学祭で販売することを目標に4月から試作を重ねた。試作したクッキーは，美老園に挽いて頂いた緑茶を使用した「抹茶」，小麦粉（地粉）を使用した「プレーン」，からいも粉を使用した「からいも」の3種類である。抹茶と小麦粉（地粉）とからいも粉は錦江町産を使用した。残念ながら，からいも粉は大学祭で販売する分量を確保できず,「抹茶」味と「プレーン」味のみを制作販売した。私たちは「欲しいものがあれば何でもすぐ手に入る」と甘く考えていた。このことから，ただ計画を立てるだけでなく，先を見越した行動をしなければならないことを学んだ。

図16　田植えの様子

おはら祭りに向けた練習は，1年次の2月から，2年生の先輩方のご指導によりスタートし，9か月にわたり練習を行った。1年次からの練習が実を結び，おはら祭り当日は，一致団結して息の合ったおはら節を踊ることができた。錦江町のＰＲ活動の一環として「でんしろう」も踊りに参加し，よりいっそう盛り上がった。

純心水田プロジェクトの活動では, 実際に錦江町を訪れ，田植え，除草を行い，もち米を共同栽培した。これは，1年次の3月に,「紫原水田プロジェクト」の田植えに参加したことをきっかけに，スタートした取り組みである。

図17　田車押しの様子

6月に行った田植えでは，苗を3本ずつ垂直に植え，泥が少ないところでは稲が倒れないように工夫した（図16)。田んぼの中にはカエルの卵やアメンボなど多くの生物が生息しており，裸足で田んぼに入ると，自然を肌で感じることができた。全て手作業で行っていた昔の人の苦労を考えると，大変な作業であると感じた。

田植えから1カ月後の7月に田車押しを行った。除草剤を使わず, 稲を健康に育てるためには，田車押しによる除草作業は欠かせない（図17)。しかし，田車だけでは，稲の生育のさまたげとなる「ひえ」をとることができない。「ひえ」と稲は酷似しているため，手作業で丁寧に除草を行った。稲刈りは10月に行う予定だったが，台風の影響により自分たちで収穫を行うことはできなかった。

私は今まで，田植えをしたことがなく，今回の活動を通して，安心安全なお米を食べられるまでの過程を知り，生産者の苦労を学んだ。分からないことや戸惑うことも多くあったが，錦江町の方々の丁寧なご指導のおかげで楽しく活動することができた。

水田プロジェクトでは，錦江町の方々が田んぼで歓迎の劇を披露して下った。また，昼食後にはたけのこ堀りやコンバイン乗車体験,案山子作りなど多くのイベントを企画してくださり，温かなおもてなしに参加した学生たちも感激していた。

10月には,純心水田で収穫したもち米を用いた「でん福餅」の販売を行った。純心水田の「田」と「でんしろう」の「でん」と「大福」をかけあわせて，“～幸福を呼ぶ～「でん福餅」”と学生が名付けた。この販売のために錦江町のお菓子屋さん2軒の協力のもと，10種類を試作していただき，錦江町役場の方々と検討した結果，原製菓舗の「いちごあんとチーズクリーム」･「抹茶あんと小豆クリーム」，菓心まとはらの「ミニトマトとクリームチーズ」･「紫いもと生クリーム」の4種類を大学祭初日に販売した。当日は，学生だけでなく多くのお客様に購入していただいた。

また，2月28日と3月1日にドルフィンポートで行われた「半島隅くじら元気市」では「でん福餅」第2弾として，春らしさ感じさせる桜あんを使った原製菓舗の「でん福餅」を販売した。大福の上には女性が大好きなホイップクリームと錦江町産の苺がトッピングされ，苺には一つ一つ異なる顔が描かれていた。

当初は2日間で400個販売する予定だったが，ＴＶ中継のおかげもあり，1日で完売することができた。お客様から「がんばってね」と応援の言葉をかけていただいたことは今でも心に残っている。

私は，地域貢献プロデュースのチーフとして活動に携わるまでは，消極的で，人前で話すことがとても苦手だった。しかし，活動を通して自分から積極的に動かなければ何も始まらないことを学び，少しずつだが，自から行動できるようになった。今では活動の中でＴＶのインタビューを受ける場面でも，笑顔で答えられるまでに成長することができた。

私がチーフとして活動することができたのは，周りの方々の支えがあったからだ。フードプロデュースの活動もある中，地域貢献プロデュースの活動である「純心水田プロジェクト」や「おはら祭り」の練習，「クッキー制作」の活動にも携わっていたため，正直大変だと感じることもあった。しかし，辛いときに手を差し伸べ支えてくれた友人や先輩方，先生方，錦江町の方々のおかげで，笑顔で活動することができた。

私たちは，錦江町を訪れ活動していく中で，少子高齢化が進む現状を肌で感じた。しかし，錦江町の方々は過疎による大変さを微塵も感じさせない明るい笑顔と暖かな雰囲気で私たちを迎えてくださった。錦江町の方々や卒業した先輩方，後輩とのつながりなど，人と人とのつながりに感謝したい。そして，これからも人との繋がりを大切にして過ごしたいと思う。

私たち自身，先輩方に支えていただいたお陰で活動を進めることができた。私たちも後輩を支えていきたいと考えている。そして，活動を引き継ぐ後輩たちには私たち以上の活躍を期待したい。(松元有紀美)

結　び

もともと，Ｇプロジェクトは，「トリプルパワー･リフレッシュ教育戦略―コミュニケーション力･プロデュース力･グループ力の育成―」という課題で，文部科学省の特別補助である「学

部教育の高度化・個性化支援メニュー群」における「教育・学習方法等改善支援」の交付を受けて，進められた。

2014年度のＧプロジェクトのテーマは，全体のテーマである「Heart to Heart ～心から心へとつながる輪～」をもとに考え，「Hearts in Harmony ～みんなで届けるありがとう～」に決めた。

現代ビジネスコースでは，個々の学生がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し，専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた五つのプロデュースにもとづき，個性の伸長をはかるとともに，学生の総合的な人間性を高めるという目的を掲げてから，7年も経過している。毎回，“Ｇプロジェクト”を通じて，学生が多くの困難に直面しながらも，自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは，大きな収穫である。

協働で何かを成し遂げるためには，多くのことが要求される。すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に，「報告，連絡，相談」の大切さと「確認」の必要性を実感したはずである。これから社会人として活躍する学生たちが，「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが，現代ビジネスコーススタッフの願いである。人間には無限の可能性が見出される。我々のプロジェクトはさらなる発展を目指して，より精力的に活動を続けられなければならない。そこに，我々の教育戦略が存在する。